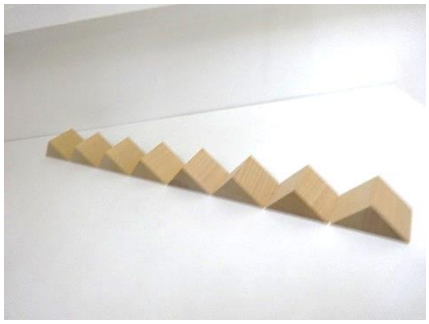
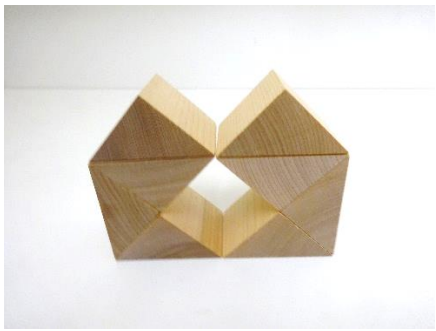
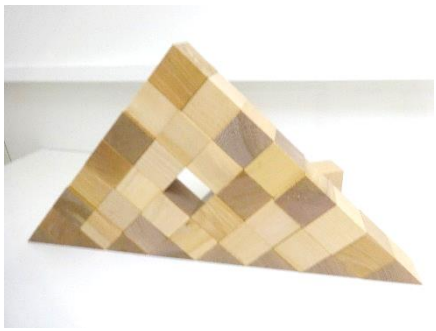
『積木遊び』って賢くなる？！

～奥が深い積木遊び～

今回は、８個の直角二等辺三角柱をガムテープでつなぎ合わせて、いろいろな見立て遊びをしたり、その上に四角い積木を重ねていき大きなお山を作り、その山の中から積木を抜き取ってトンネルを作ったりして遊びました。今回使った積木は、和久洋三氏というおもちゃデザイナーがこだわり抜いて開発し、日本の自社工場で職人さんが丁寧に作った“ワクブロック”というものです。この積木の特徴は、とにかく１つひとつの積木の制度が、非常に高いので、ガタツキが無く、子どもが積んでもきれいに積むことができます。積木の中でも“本物”と言われるもので、その気になれば天井までも積み上げることができるくらい正確なものです。子ども達は、“本物”だからやりたいことが自由にできて、イメージを具現化でき、創造力が広がっていくのです。粗悪な積木であれば、思った通りに作れないので、イライラしたり諦めたりして不自由を感じ、創造力は広がっていかないのです。

【三角を直感する遊びをたくさんしました】

直角二等辺三角は、長辺同士を合わせれば正方形になり、短辺同士を合わせれば大きな直角二等辺三角形にもなれば、平行四辺形にもなります。それが８個もつながっているので、たくさんの形に変化し、子ども達の創造力を掻き立てます。

子ども達は、“自分の手”でたくさん積木を動かし、おもしろい形をたくさん作り、見立て遊びをたくさんしました。

積木は、くぼみがついていてブロック同士をくっつけられないので、重力に反した積み方をすることができません。それによって“ものの中心点を認識する力”“バランス力”“注意力”などが遊びながら育つといわれています。

人間の脳は 6 歳までに８０%、10 歳までに残りの２０%が出来上がるといわれています。図形などの幾何学や空間認識の力は、この時期にほとんど決まってしまいます。この時期に三角と三角で四角が出来たり、大きな三角が出来たりといった遊びをたくさんすることで、それらの力を楽しみながら育てていくことができます。

また、『手は第２の脳』と言われています。人間の大脳が発達したのも、他の動物と比べ

群を抜いて手の機能が高く、手をたくさん動かしてきたからだと言われています。と同時に『現代の子は手が虫歯』とも言われていて、自分の手を動かして何かを作ることが極端に少なくなっています。自分の手を動かし、工夫し、何かを作り出すという事は、現代の子ども達に最も大切なことの１つと言えます。

加えて、今の子ども達の周りには、ユーチューブやゲームなど、僕たちが子どもの頃とは比べ物にならないくらいのエンターテイメントが溢れています。しかし、それらはどれも刺激的で過激です。３歳の子どもでも、２時間、３時間平気で画面の前でじっとしてみています。ある脳科学者が脳の動きを調べたところ、テレビやゲームを見ている時の脳は全く動いておらず、情報が受け身になり自分では何も考えていないという研究結果も出ています。“積木”や“絵本”や“砂場”など、『刺激の少ない素朴なもの』で遊ぶことも、子どもの主体性と創造力を高めることに非常に大切な要素です。

最後は、6000 個の木のビーズを樋から流して、大きなたらいに乗って遊びました。みんなとても楽しそうでした。最後は、片付けも遊びの延長線上になるよう水のタンクの中に樋で転がして最後まで 6000 個のビーズを飽きることなく片付けてくれました。

1 時間 40 分があっという間に過ぎました。子ども達は、大人と違って素直で正直なので、楽しければ集中しますし、つまらなければすぐに飽きてしまいます。大人は子どもにさせたい事が色々ありますが、『楽しい』事でないと子どもの脳は情報を吸収しないという事が脳科学で証明されています。

子どもは集中力がないのではありません。楽しいと思った事は、何時間でも集中します。子どもがすぐに飽きてしまったら、その子が集中力が無いのではなく、その子にとって楽しくなかったと思ってあげた方が良いでしょう。

とくにくじら保育園の年少さんは、とても子どもらしく、それでいて赤ちゃんのような幼さが残っている子がいない、とてもしっかりしたお子さんばかりでした。集中力も素晴らしかったです。時間に制限がなければ、何時間でも積木遊びができたと思います。そして、僕自身が、子ども達の創造力ととても嬉しそうに遊んでいる表情を見ていてとても楽しかったです。

子どもが夢中になれることを見つけてあげる事が、その子の集中力ぐんぐん伸ばせることであり、能力がどんどん向上することなので、それが大人の仕事だと思っています。

にじグループさんの子ども達は最高でした！！

わくわく創造アトリエ　田上（たがみ）